

島田清次郎未定稿翻刻 II

The Reprinting of Unfinished
Manuscripts by Seijiro Shimada II

小林輝治

前回に引きつづき、清次郎が残した「保養院」時代の草稿から、さらに二編を選んで翻刻、新たに幾つかの問題を考えてみたい。

その一編「煙」は、清次郎とわずか四か月ではあったが世帯をもった小林豊とよをモデルにした短編である。豊は、大正十一年一月から清次郎と新婚生活を始めるが、姑との間もはかばかしくなく、彼の激しい嫉妬心にもほとほと疲れ、山形の実家へ帰ったといわれている。それは、第一次世界大戦後の欧米視察を目的として、彼が外遊（大11・4―12）に旅立ってまもなくのことで、当時既に、清次郎の子良輔りょうすけ（大11・12・7生／昭20・8・15没）を宿していたが、それにもかかわらず、豊は一方的にこの結婚を破棄したのであった。したがって周知のように、極端に自尊心の強かった清次郎は、生涯豊を許すことができず、わが子良輔についても自分の子としての認知を行なおうとはしなかった。その間の、いわば深い憎しみをモチー

フとして生まれたのが、この「煙」であったと考えられよう。

この題もツルゲネーフ（彼は「ツルゲネーフ」の小説から取ったことを冒頭でことわり、あとで改めて、豊のみならずその兄相象（しかも兄について）までを引き合いに出して「君等は生涯を煙りにしてしまったコークスみたいな畜生」だと罵倒、もっと象徴的な意味をそこにこめようとしている。それは不正不義、いわば罪悪というものの、いかに空しく愚かしいかということであろう。その間『カルメン』の劇中歌「煙草のめのめ」がきわめて巧みに取りこまれてもいる。

もっとも、いくら未定稿であるとはいえ「部落の者共」云々という全く不当な差別表現があり、また「美人局つとめばせ」を働いたとして、女を縛り上げる場面にしても、主人公の元慶大教授村山法学士の「この婆あ犬め／海老えびにしてやる」「彼れは、ふんじばった獣女の背を

どかんと足でふまえて」云々は、あまりにも粗悪、粗暴な表現である。しかし「保養所」とはいえ、実際には「収容所」的なその性格や、まして一時的錯乱から既に正気にもどっていたにもかかわらず、それが少しも認められないで放置されていたのだとすればどうか。そこにはもう少し弁護の余地があつていいのではないかと思われる。が、いずれにしても、この草稿から清次郎が狂人だったという印象をもつことはむずかしい。この事は、次の一編「縁」においても同様である。

テーマ・ストーリーは勿論、文脈・語彙・漢字に至るまで、未定稿段階ということを考えれば全く問題はない。

主題は、文字通り「出会い」というものの不思議を考えさせるものである。

小林輝治 筋も三年余の外遊から帰った社会運動家野島民造が、八千代子という女と再会、この女との関係を軸に展開する。その間、自分にとっては「思想上の母」ともいふべき存在だとして十年ぶりに会った暁烏敏のこと、さらには無政府主義者大杉栄とその妻伊藤野枝とのことを淡々と語り、人生の「縁」のいかにミステリアスであるかを述べて終わっている。

しかも、清次郎の最晩年に当って、自分の思想形成上最も影響を与えた人物として暁烏を挙げていることは、彼と浄土真宗との関わりを見る上からもきわめて興味深い事実であろう。

さらに注目すべきは、この稿の終わりに書きこまれた日付が「一九二五年五月十日」となっていることである。ということは、先の「煙」も「縁」と同じノットに書かれていることから、いずれも、

「保養院」に強制収容された大正十三年七月から、恐らくはまだ一年もたない頃に執筆されたものとの推定が成り立つ。したがって五年九か月（大13・7・31—昭5・4・29）狂人として「保養院」で過ごし死んだとされている通説には、どうしても従えないという問題が出てくるわけである。

なお「地上」第一部以来見られる社会改造への志向は、この二作においても依然として衰えず、その変わりなき執念にはまたまた驚きを禁じ得ない。

終わりに、翻刻の際、とくに留意した緒点について述べておく。

① 漢字、かなづかい等の明らかな誤りについては、その横に「ママ」を付す。ただし、あとで漢字を入れようとして先にルビを付したものの、及び名前をあとで入れようとして空欄としたものについては、を、さらに破損があつたり消えていたりしてきわめて判読のむずかしいものについては、その字相当分を「X」で示しておいた。

② また、横へ補正するなどして、誤って直前の助詞等を重用したものについては、その不用のものに「」を付した。逆に重用ではなく脱落させたと思われるものについては、その落ちたと見られるものを△▽をもって補った。

③ さらに、漢字のうち現在施行されている「常用漢字表」にあるものは、その字体によって統一した。

煙けなり (小説)

嶋田清次郎

(亜米利加を訪ねた時、桑港で小島鳥水氏にお目にかゝって、同氏の家庭を拜見したが、ロシアの文豪十九世紀初頭に於けるツルゲネーフの真筆蹟を見ることができた。この小説の題の「煙」はツルゲネーフのロマンス「煙」をとって来たものであることをおことはりしてをきまます。)

一、

少し大がかりな創作の仕事をもって大磯王城山の麓の別荘にこもってゐた、前慶大教授の村山は、一千九百二十一年の暮れ近い、うっそりと気味の悪い曇り日を、幸ひ日曜だったので、原町の友達の黒田を訪ねた。

村山が学長としようとして塾を退いた後ちも、辛抱して踏み止ってゐる生物学教授の黒田は、最近結婚したばかりのせいだったか、折りよく家にゐてくれた。

「どうしたのかと思つて心配してゐた。塾でもよく君の噂をして何かの機会に、君が塾へかへつてくれることをみなが希望してゐるのだ。まあ上りたまへ。」

汚れてはいるが、掃除のゆきとゞいた書齋へ、村山をとほして、

荻島初冬の松の木の多い築山や池の風致を具へた黒田の自慢の庭園のみえる、硝子戸を明けはなした。村山は辞職以来の挨拶や、黒田の結婚祝ひといふわけではなかったが携えてきた心ばかりの贈り物を、極く内気な彼れの前に、顔をあげるのも面映ゆげな黒田の新妻に差し出した。

「お噂はきいてゐます。ようこそおたづね下さいました。」

村山と同席して、郷里を同じくし、大学を同じくした司法官候補の加野が、青年らしい面に血の色を見せてうそ寒い一日暇の一日を同郷先輩の間にあるのがうれしくてならないやうに始終にこにこしているのだった。

「塾を止めてから、仕方がないから少し大がかりな創作にとりかゝつてゐる。それが完成したらしばらく倫敦大学へ、経済学の研究にゆこうと思つてゐる。」

「君の受持つていた経済原論の講座は、予科の教授だった田野君が一時、代つて受持つてゐるやうだ。——さう、創作の方へ一時専念になれば、君の道楽もとうとうものになつたといふものだ。」

黒田は×××顔容只気節ある村山の成功をうれしむやうに微笑むのだった。

「とにかく、僕等は経済学者としての君は勿論だが、作家としての君の将来に大きな前途をみてゐるのだから、——ことに君の欧羅巴への旅には大賛成だ。日本の非文明にあきたらない現状打破論客の君がヨーロッパへゆくものだから、ツルゲネーフ位の仕事を僕らは期待してもいゝだらう。」

そして三人の話題は、楽しい気のをけない同郷人同志の雑談には

いった。それは時計のセコンドの刻みにも焦燥せねばならぬ青年学徒にとつてのわづかな息ぬきの時間だった。同じ風土に育ったものの、相互に認め合ふ優越の感じ、先輩は後輩を引きあげ、後輩は先輩を支持する協力の精神が、そこにみなぎっていた。話題はロシアの文学にうつった。

「原さんの我々国民への遺産の一つである倍審制度が実施されるやうになったのは、僕等もいゝことだとは考へていますが、善良な市民がX人よつた寄つた幻で、いはゆる悪人として世間に知られてゐる、善良な悪人、以外、世間に知られていないほんとうの悪人にかゝつては、倍審制度も裁判官も、どうにも仕様のないものだと、僕等はよく、役所で話してゐます。トルストイの言ふやうに、人間が人間を裁くことは不合理で、不可能でせうけれど、女といふ女がカチューシャのやうに可憐な娘であるといふわけではないでせうし、トルストイとは異つた意味で、人間が全能でない限り、ほんとうの悪人をどう裁いていゝかは全く不可能のやうに思ふことがあります。そしてその立場からいへば、トルストイと正反対に死刑はXのX的である、死刑がなくては人間の悪を防止することが出来ぬといふ刑法学上の議論が正義だと信じられます。——尤も、厳正なる審判といふことは、天才にまつよりほかに仕方のないことだと思ひますが。」

「トルストイの主張は、近代の道徳倫理の上からいへば、一種の個人主義的無政府主義で極めて低い程度のもので、悪人を罰するに死をもつて少くともすることは、動物学の実験の上からみても、合理的だ。——事実、人類中のライ毒菌である不倫不逞の悪人は死

刑にするよりほかに仕方のないものだ。現に我々の身体細胞内の白血球は結核菌や梅毒菌を刻々に、殺しつゝ生きてゐるのだから。類進化といつては、少し広汎すぎるならば、国家社会の進化のためには、死刑は必須の手段であるのだ。これは、生物学上の科学的見地からみても肯定できる正義の主張なんだ。フランス革命のギロチンや、労農ロシアのスパイ死刑や、アメリカ南部に於ける黒奴私刑のごときも亦、科学的進化論の立場からは認められると同時に、刑法学上の死刑存続論も必要であり、必然であり、これなくては、トルストイのいはゆる「人間が人間を裁けるかどうか」以前に、「人間の眼をくらす悪人を脅威せしめ、悪事を未前に防止し得るかどうか」の問題を解決するわけにゆかないのだ。——もう一步すすめていへば、一口に人類といふけれど、現代では、Xに生物学的状态に於ける'Mankind'といふ類別をもつて一つに言ふことは出来ないで、優越なるものの道徳をもつて、とうてい向上するか、又はXするか、どっちにもなり得ないで、正当なる代価を支払はずして優越者の享乐的部分丈けを奪略しようとする梅毒菌を、絶滅せしめることは、正義どころか、生物学的義務なのです。」

黒田は少し紅潮して、穏やかな体容のうちに秘めてゐる、明晰な頭脳のひらめきをみせた。そして、村山が、あくまで、現代の腐つた風潮に対して徹底的にProtestであることを熱望するのだった。

「大事業は大いその人が、最も孤独なる時にachieveするものだ。」と村山の一時的な逆境を励激した。

「ドストエフスキイが、罪と罰、の罪だけを書いて、罰を書かなかつたのは実に惜しいと思ふ。」と、村山は見当ちがいのやうな

彼れの激励にこたへた。しかし、黒田や加野の正義論には勿論異存はなかった。

午餐を共にした村山はその日一日、黒田の家庭で楽しくくらし、薄暗らくなった頃、加野と二人で外へ出た。二人とも実にしばらくぶりだったので、このまゝで別れる気がしなかった。彼れは東京へ出て、遅くなった時、いつも泊まることにしている、学生時代から知合の家でその夜もゆっくり休むつもりだった。

「加野、今夜、もしよかったら、つきあはないか。」村山は、少し、学生時代の豪放さにかへって、彼れ×信頼してくるやうな若い加野をかへりみた。

二、

ゆきなれたその家では、「柳川」の料理か何かで、彼れがいつも後輩の青年をつれてゆくように、何くれとなくゆきとゞいたもてなしをしないではおかなかつた。ことに、彼れの好きな、上品で、艶やかな、江戸ッ子の小春が、彼れと加野の間をとりもつのがだった。

「こちらは司法省へつとめていらっしやるの。畏いわねえ。」

「畏いことがあるものか、僕達がいるんで、君等もこうして命があつて、その日を暮らしてゆけるのではないか。」

加野は、初気な学生が世間へ出たてのフランクさで、快活らしく振るまつた。

村山は、盃をふくんで、小春がときどき「初心な坊っちゃん」のやうな加野をなぶりさうにするのをたしなめ乍ら、加野の高等学校

時代のことを考へてみた。中学を出て一高の試験に落第した彼れは一年おくれて四高の試験へはいつたのだつた。四高卒業間際の頃、市街の高台の練兵場の通りに、一人のアメリカの婦人が聖書の講義を毎週日曜の朝、ひらいていた。知識欲に燃えた高等学校の学生は、耶穌の教えの何んであるかさへ考へてもみずに、西洋の婦人に接する好奇心や、生きた英語の会話ができる研究心から、誘ひあはせて、枯れた秋草の茂った高台の鑑戸のひらいたみす・てつとろの西洋館へ通つた。父を成功したる羽二重機業主にもつ加野は、他の単に好奇心や *intellect* の上達が目的の連中とちがって、ことに信心深い基督教徒だといふ評判でもあり、さうらしく見えてゐた。——彼れは先輩の中橋徳五郎氏の生家である土塀の長くつゞいた高台の家の表通りを、加野と二人で歩きながら、みす・てつとろの講義した、ノアの洪水のことについて話した記憶をもつていた。

「アメリカ。」さういつて、彼れは右手をあげてピストルでこめかみをうつ真似をしてみせたが、クリスチャンでこりかたまって小説一つ読んだことのない加野には、彼れが、罪と罰の一節をしやれてみせたのが分らないらしかつた。

「いや、ありがとう、僕は酒はあまりのめないのですから。」などゝいつて、小春のながしめに萎すくめられて、あまり強くない酒に、酔ひかけた善良な青年の加野を、彼れは、むかしと少しも変りがないなど、眺めていた。

「おい、役所の様子はどんなのだい。僕なんか、いつ訊問にあつかるか分らないからその時は、宜しく頼んでおくよ。」

「役所はいたつて閑で、小春日和の暖かい日が、いつも×××××

×の赤煉瓦の地方裁判所の薄暗い構内へ射しています。僕等はいたって穏やかな毎日を、至極のんきに、退屈にくらしてゐます。」

「それなら、今夜は、久しぶりにゆっくり呑みあかさう。」と、村山も腰をすえて、小春の酌でのみ出した。

「さうお、司法省へ出ていらっしゃる方なの。畏いわねえ。」と、四五人のお酌達は小春にならって、加野の周囲をとりまいてもてなした。

「僕は、村山君、いたって、善良な、クリスチャンとして、人もゆるし、自分もさう信じているのだが、此の頃全く、どうにもこうにもならない、苦しい一つの scene に苦しんでいるのです。」細い鈍い瞳をむしる無気味な位る真面目な光りですえ乍ら、加野は村山の前は一切を告白しはじめた。「最初は僕が悪かったのかもかもしれません。しかし、僕丈が悪くは限らないと思ひます。今年の未だ九月の学校では日本中休暇がやうやく始業はじめのあった頃だと思ひます。私は牛込の同じ司法省へつとめて部屋を同じくしてゐる司法事務官で、山形県出身の辻本君の処へ遊びにゆきました。刑法学上の新進学者でもあるのです。私とはか二三人の同僚と遊びにいたつたものですが、ラッパの大きな蓄音器で、端唄や何かをかきかされたのですが、その時、辻本君の家に寄宿してゐる何んでも辻本君の出身地の鶴岡から一つ彼方の国で羽前大山といふ僻遠の土地の出生で、その頃神田の職業学校へ通つていた女学生で、 といふ女

と知り合ひになりました。話の模様では、同じクリスチャンで、文学などが好きであつて、話してみると、案外に話が合ふので、私は自分のアドレスをのこしてかへつてきました。それを機会に、園枝

は私の下宿へ度々訪ねてくるようになりましたが、村山さん、羞づかしいことですが、私は、その女と関係してしまつたのです。」

「ふむ。」村山はまたいつものよく世の中へ出たての青年の一種の功名話しかとうっかりしてきいてゐた。

「ところが、この頃、その女は、私の子供をはらんだといつてすわりこんできてゐるのです。」

「君はいったいどの程度でその女と接触したのだ。」

「ほんの二三度です。——」

「処女だったのか、それとも——いったいどういふ女なのだ。」村山は少し問題を重大らしく考へてきき訊した。

「嫌なお話にならない女です。Old duck ⑦です。背の低い、廃類なフニヤくの、ゆがんだカニみたいな女です。私はその女の地獄へ引きづりこむやうな、消えているやうな、虫の息のやうな、哀れっぽい声にだまされて、その女の醜婦であることや、つかむだ腕のザラくと絞膚であることや、髪の毛の女乞食のやうにちぢれっ毛で、皮膚に光沢がなくなつたんで瘡せほそつてゐることや、腰骨が太く広くて、肉身がだぶだぶで、瘡たやうにがらがらの×××であることを忘れていたのです。処女だの処女でないの、といふ問題ではないのです。もちろんさういふ方をよせつけた私が悪むいのです。——さういふわけで私はその女が自分の子供を胎ませたとはどうしても信ずるわけにゆかないのです。ことに、この頃、私が、この女が宿へ訪ねてくることを拒絶してからといふものは、その女の実兄だといふ、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧、 ⑨、 ⑩、 ⑪、 ⑫、 ⑬、 ⑭、 ⑮、 ⑯、 ⑰、 ⑱、 ⑲、 ⑳、 ㉑、 ㉒、 ㉓、 ㉔、 ㉕、 ㉖、 ㉗、 ㉘、 ㉙、 ㉚、 ㉛、 ㉜、 ㉝、 ㉞、 ㉟、 ㊱、 ㊲、 ㊳、 ㊴、 ㊵、 ㊶、 ㊷、 ㊸、 ㊹、 ㊺、 ㊻、 ㊼、 ㊽、 ㊾、 ㊿、 ①、 ②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、

血をしぼりつくされ、悪事といふ悪事をしつくしたやうな×びた、陰鬱な男が、その女を時勢おくれのけばけばしい衣裳をつけさせて、二人で揃って、僕の家へやってきて、私につきまとふのです。——つまり、そいつらの言ひ分では、身重になったその女と一日も早く、正式に戸籍を入れて結婚しろ、それでなければ、出産病院へ入れなければ、ならぬから、金を出せといふて、脅迫しているのです。——「その司法事務官の辻本君に、未だ相談しないのか」と村山はすわりなほしてきいた。

「さういふ話を、君毎日、同じ部屋に卓子をはさんで事務をとっている先輩に話されやしない。君だから、どうしたらいいか分らないので、御相談するのです。」

村山はしばらく考へていた。「——その女は、もしや、哀れっぽい、この世の終りが近づいたやうな声で、近頃はやっていると、船頭の唄、や、一昔前にはやった、今度生れたらロバにのっておいで、ロバはよいもの市場へもって行って、可愛い女とねてくらそいか、いふイヤな歌をうたいやしないか。」

「さうです、そして、最後にきくと、あの、一切合財みな煙り、といふ実にぞおっとする、存在の底をゆるがして、くづれゆくやうな頽廢的な唄を口ずさむのです。」

「あいつだ、あいつだ。」村山は胸にこたへて、叫んだ。「おい、加野、用心するがい、その女がはらんでゐるといふのは、君の子供なのではないのだ。その実兄といふ奴は、ゴロツキだ。君は美人局にかゝっているんだ。実兄といふ奴は、その女の情夫で、腹の子供の持主なんだ。そこらあたりの初心な大学生共の間を、引きづりま

わいて、何んとかして誰れか一人をダマしてねじりつけるか、××のやうにくちゃく／＼に誰れのためにも共同便所となって腹の子供の主をこまかそうとしてゐる、僕等の間ではい、笑ひ者にしてゐる有名なノロマのゴロツキかもしれないよ。——俺が一度、君の宿へ行って、その女の正体を見とめてやらう。仮りにそいつ共でなかつたとしても、さういふキタナらしいすたれものを押しつけて、——君の子供でないことだけは、今の瞬間でもはっきり分る。安心するがい、——何も知らぬ書生から金をしぼらうとする奴は、立派に無頼漢だ。俺れが叩き出して赤いきものをきせてやる。——一度君の宿へ行って解決してあげよう。」村山はなぐさめた。そして、二人の話にききいっている小春をかへりみて、「何んといったけな、あのイヤ／＼な世紀末的な亡国の唄を歌ってみせないか」といった。

「亡国の唄ってなあに。」

「船頭の歌とかいふやつだ。」
小春は少ししよげて、三味もとりあげずに、それでも、己とお前は利根川の船の船頭でくらすのよ、といふ流行のうたを不本意さうに、くさりうたが、それは陽気で少しも、あの幽霊のやうな女の声とは似ても似つかなかった。

「ハッハ、君がうたふと、また異ってメーリイな円舞曲のコーラスのやうにもきこえるね。」

「だめ、そんな大道芸人の流行唄などうたはせては、」と小春は話の模様で、少し真面目になって、はじめて三味をとり上げた。

三、

加野の下宿は、本郷千駄木町の裏通りの、彼れの友人で同じ塾の仏蘭西文学の教授の家に近い処にあった。

村山はその夕方、その女が加野を訪ねるといふので、午後、大磯山王の別荘を出て、加野の下宿を訪ねた。大学を出てまでも、未だ余りに簡素な、質儉らしい加野の生活ぶりは、村山に、成功者だといふ加野の父の厳格な節儉——さ細な経済的^{りんじゆく}と、性慾^マのほけ場を、花柳の巷に求めることを知らぬ、いはゆるクリスチャンの偽善^マとが、かへって、さういふ死骸も同然の腐れ女に關係させて恐ろしい泥の中へ足をふみこむ過失をおこさせる原因であることを物語っているやうだった。

「いったい、どういふ工合にその女は、君を引っかけたんだい。」

「夜、夕食前後にやってきて、大てい夕飯の御馳走になってかへるのだが、最初に關係した夜は、別にどうといふこともなかったが、どうもへんてこでならないのは、自分で電燈を消して、わたしは暗いのが好きだ、などといふのです。何んだか、ぐちやぐちやで、膚はザラザラだし、僕はたゞ自分一人ではてって、無我無中^マだったです。少くとも、私は、その關係によって、生殖を予想するわけにゆかない接觸でした。」

「さういふことをきいているのではないのだよ、その女の君の引っかけ方なんだよ。」

「それは、イヤな歌をうたって、もうこのまゝ世界が終末であ

るやうな、毒蛇の匂ふやうな、気分を私をつゝんでしまつて、そのまゝそこへとけて消えるやうに打ったをれさせるのです。——そして、何故かしらんが、五円下さい。と帰り際にいふのでした。」

村山は不逞な、兄弟相応の畜生共が、塾に關係している名家の学生たちをつけねらうのみか、何も知らぬ、同郷の加野にまでつきまといっているらしいのにぶるぶるふるえて、思はず拳をにぎりしめた。しかし、もしかすると人違ひかもしれないといふ懸念で、彼れはその女の来るのを待ちうけてゐた。

一千九百二十一年十二月初旬の、雨が降つたり止まったりする夕宵のことだった。

「いつもの女学生の方がお見えになりましたが、お通ししてもいいでせうか。」

「一人でできていますか、(村山は親指をみせて) 男といっしょにきていますか。」

「男の方は何んでも外に待っていられますやうです。」

「ふむ、それなら、とにかく、通してくれ。」彼れは加野に代つてこたへた。

頼りのないやうな、足おとがして、襖をあげて背の低い袴をはいた「癩^マった女」がはいってきた。

そして、机の上に腰かけて、ぢろりにらみつけた村山を一眼みると、はっとしたらしく、その八畳の畳の上へ、べちゃんとはたばってしまつた。

彼れは万一、人違いであつたかもしれぬといふかすかな希望の燐光が、その瞬間絶望的に絶滅されて、世界が、黑暗になつたやうな

手いたいショックを受けて、さあっと蒼くなってしまった。

やがて、ぶるぶるふるふるえの出るのを我慢していたが、とうとう堪え切れなくなって、「おい、畜生、一切合財みな、煙りの歌を歌へ。」と口をきった。

その女は、実に絶望的にも、塾の学生達の宿を訪ねるのみか、彼の宿へもやってきて、世紀末的な、天変地異の凶徴のやうな、イヤな頹廢的の歌をうたったその女であった。

「あなたは、何か人非人的な罪業に自分を苦しめているのだらう。」
彼れはその時、一眼みると、その女を看破したのだった。「情夫といふのは、あなたの実兄のことだらう。」

さういって村山はつめよせて、白状させた日のことを忘れるわけにゆかなかった。

「一切は決して煙りではありませぬ。あなたは、十七年アメリカの西海岸で×血をしぼられた吸殻の実兄に生血をすはれた吸殻であるかもしれぬ。あなたは逃避せずに、あなたが、実兄と関係した今日××の人類の意識では、畜生の所業としている行為の実行者で、その同情していへば、犠牲者であることを自覚しなくてはなりません。しかしそれは、誰れの罪科でもないのです、あなたと、獣のやうなあなたの実兄との罪科なのです。罪が、当事者丈けの間で済んでゐるうちは、社会は何事も言はないだらう。少くとも今日の進歩したる階級は見てみぬふりをして鼻をつまんで通りすぎるより仕方ないだらう。しかし、あなたが、自分が畜生道におちているといふ醜劣そのものの権化となつてゐるといふ自覚をせずに、そのトバッチリを善良な健全な他人に引っかけるとき、その他人が善良で健全で

あればある丈け、黙つてはいない。制裁の鉄拳は醜劣なる畜生道に陥没しているあなた方兄弟の頭上へ下ることを覚悟しなくてはならない。今度丈けはゆるしてやる。自分の始末は自分でするがいゝ。それとも、兄と妹が肉交して子供を胎んでも天下に羞じることがないと思ふならば、その哲学的根拠なり宗教的信念なり、科学的基礎なりを天下に公表して、堂々と自×の間を、兄と妹とがつるゝ瀾歩するがいゝ、他人に迷惑をかけるのだけは止めろ。」

さういって、村山はけがらはしき、Diamondを叩き出したのであった。

「兄はわたし丈けではないのです。郷里の羽前大山にゐる妹とも、またひとりの実母とも関係してゐるのです。」ときくにたえぬ最後の白状をこの女は、彼れへたゞきつけて、去つたのである——

「何も知らぬ加野君を、君達は、また、だましこもふとしてゐるらしいが、君等は生涯を煙りにしてしまったコークスみたいな畜生族だらうが、加野君はやうやく大学を出て、これから世の中へ出て「て」ゆかねばならぬ、いはゞ、ダイヤモンドの一種だ。この世界を煙りと観するのは君等の勝手だが、何もしらぬ、加野までを、煙りの中へ捲き込「こ」もうと——」と言ひかけたが、すでに言説を超えて、彼等が性こりもなく、純真な青年を碍害して、すでに、現にその白紙のやうな清純の意識に拭ふ可からざる汚点を加へるのみか、現に、眼前にゐる女の腹の中の子供の持主なる肉親の兄が、門前に来て待つてゐるまでも、詩人肌で、クリスト教徒の教養をうけた加野へねじりつけやうと、脅迫してゐる事実を直視して、自分のことのやうに憤怒がわき立ってきた。

「おい、俺の顔に見覚えがあるか。」村山は、できるだけ憤怒を抑制して、言った。

女は案外平気で「あなたはどなたですか、存じません。」と言った。

恐らくとなり部屋まできこえたであらう音をさせて、園枝の頬を平手でなぐりつけた村山は、矢庭に、その Old back のざらざらの、脂のにじみ出たくびすじを制えて、「加野、押入れの中の細引きを出せ。」と言った。

「細引きがないのです。」

「それなら兵子帯をかせ。」と未だに、こんなきたならしい女の前に、躊躇してゐる加野に焦々して、彼れは、叱りつけた。加野は、押入れから、蒲団を送る時の荷作りにつかったらしいつなぎあはした、兵子帯をとり出した。

村山は、その厚かましい獣女を、畳の上へうつむけにねじ伏せて、「この婆あ犬め、海老にしてやる。」と、両手と両足を背後へふんじばって、兵子帯でしっかりしばりあげてしまった。

ふとみると、襖をあけて、ひとりの凋びた皮膚のたるんだ、中背の、古びた洋服をきた、一眼で、このきたならしい獣の兄で情夫だへとV分る、四十近い男が、ひょっこり顔を出した。こいつだあ、と村山は直覚して、いったい無神経なのか、こちらを世間知らずの学者か大学を出たての書生っぽと見くびっているのか、こりしようもなく人間面をして顔を出した、男の厚かましさに、唾然として、彼れは、ふんじばった、獣女の背をどかんと足でふまえて、しばらくにらみつけていた。

「お前か、この女の情夫は。」

「いや、私はこの女の兄です。」さういって、その四十男は部屋の中へはいってきた。

「お前の面の皮は、犬の皮でも張ってあるのか。」村山はどうどうこらへかねて、平手で一つはりとばして、十七年アメリカの労働でこりかたまったわりに骨格のがっしりした、その男を、ねじ伏せて、ことによったら、彼れの方が危くなりさうになる体感を感じながら、「こいつは精神的節操と、思想と感情がめぐまれていれば、一種のニヒリストになるやつかもしれぬ。と瞬間ではあったが、買ひかぶって、どうにか、「海老」にしばり上げた。

そして園江を仰向けにして、その上へ、うつむけにその畏るべき無茶苦茶者をかさねて、「おい、それほど肉親の妹や親と私通したことを、この東京中広告して歩きたければ、俺達の前で、してみるが、い。犬や猫は、親肉相姦をすることもあるが、少くとも他へ迷惑はかけないからな。——」

さういひ乍ら、村山は、彼等二人の皮膚がぶくぶくにふくれたやうにたるんでいたりと、ざらざら、またならしい吹出ものが、かさぶたのやうに褪せてゐるのをみて、今迄、自分や加野の身辺へ直接ふりかゝる災難、被害としてそれを除去し征伐するのにきうであった心持ちに、事実を客観する余悠ができてくるにつれて、その心のすき間へ、あまりに、非文明的な、あまりにきいたことのないひどい、汚らしい事実から、「こいつらはもしや他の人々と公然結婚をゆるされてない東北未開の地方に凝集している人種のことになった部落の者共ではあるまいか、それでなければ、何か、祖先から伝統の

った。

「君は、役所を休んではいけない。下宿は、己れの処へ来ていてもいゝが、それよりか新婚間もなくで少し迷惑かもしれないが、黒田君の家へ宿をしてもらいたまへ。」

と言ったが、また二三日前の待合での、成人した素振りを考へあはせて「それにも及ぶまい。」と考へ直して、とにかく、今後つゝしまねばいけないことをくれぐれも忠告せずにはいられなかった。

「女がほしくなったら、芸者に抱いてもらへ。深くなつてはいけない。身動きがなくなりかけたら、裸かどとび出してしまふがいゝ。」と言った。

五、

とにかく、一つの善事——といふよりも、泥沼へひきつりこまれようとしていた加野のために、掃除をしたといふはればれしい意識で、大磯の王城山の別荘へかへってきた。村山を机の上に、雑誌や新聞と一緒に、「この葉書を受へけ」とつたものは、九人の友人へ貴下の幸福を祈る、といふ同文のハガキを出さなければ、必ず災禍がくるだらう。」といふ同文の葉書が数枚まっていた。彼れは、正座してしばらくそのハガキを見ていたが、この二三日来の忌はしい記憶がよみがへって、彼れはこの愚劣な迷信的流行をはじめたといふアメリカの一海軍将校を、 $\square \times$ するやうに、置火鉢の中へ、そのハガキを引きさいて燃やしてしまった。

「どこの奴か分らぬやうな奴等の気まぐれなハガキの二三枚によ

って、この大地にしつかと根を張った、現実の瞬間瞬間をふみしめてゆく白日生活に、爪のあかほども干渉されたり影響されたりするわけはないのだ。こういふ不吉なハガキは \square 刑に処してやるのが一番だ。——用事もないのに、一時に九枚もハガキを無駄使ひすれば、もうかつてよろこぶのは通信省位のものだ。」

村山は、めらめらと赤い焰をはいて薄黄色の灰片になる幾枚かのハガキをみつめてゐた。淡は白煙が一しきりしめきつた冬の夜の部屋を立ちこめた。

村山が倫敦へ発った少し前に、善良な淑女と結婚して間もない加野は東京地方裁判所の検事補に就任した礼をいつてかへった。

(をはり)

注

- (1) 清次郎の場合、最も目につく混同が「ゐる」と「いる」である。もっとも殆んどが「いる」と書かれている。
- (2) もちろん「」とあるべきところである。以下同じ。
- (3) これで「うぶ」と読ませるわけであろう。
- (4) これも「うぶ」か。
- (5) 金沢出身(文久元一昭9・73才没)の政治家で、政友会の重鎮。大正七年文相、のち商相・内相を歴任する。
- (6) 前後から推して、あとから「園枝」の名を入れようとしたものであろう。なお後半では「園江」の名になっているが、時間を置いて書き継ぐ中で起きた不備かと思われる。
- (7) 「どうしようもない奴」ぐらいの意味で使ったものであろう。「duck」には「修飾語を伴って」欠陥のある人物」の使い方がある。
- (8) これは「きずつい」と読まずのであろう。

うにちびちび酒をのむのを不思議に思ったことであつたが、今、どうにか盃を手にし得る自分を不思議に思はずにゐられなかつた。彼れは森井を前にして、森井達に別れてからの七八年間を考へると自分ながら、「はるばると来つるものかな。」と一種の詩人めいた感慨にうたれずにゐられなかつた。それは独逸にゐた時分、ハイデルベルヒの古城で、もと東大教授だつた某氏（むかし）と語り明かした折りの感慨にひとしかつた。たとへ、後者が空間の遥けさであり、前者が時間の遥けさであるとしても。

「名古屋には、今、誰れがゐるか知ら。」

「誰れもませぬ。××で、×田さんが来て講演をしてゆかれまして。」

「これも一つ講演会をひらこうか。」

朝食を久しぶりですまして、二人はあらためて、この急な思ひ付きのやうな形式で、計画されはじめた「講演会」の準備をはじめた。森井はこの市街での大新聞社へ電話をかけて、彼れの来たことと主筆に会見したい旨を通じた。簡単な午飯（ひる）をすませして、幾年ぶりで再会した彼れと、森井とは、薄っすらと日の射す、冬の午後の、平坦な、巾広い、平原の市街を歩いた。

二、

彼れと同郷のある大きな新聞社の主筆に、薄暗らい新聞社の二階で会つて、講演会の打ちあはせをしてから、彼れは、森井につれられて、「名古屋料理を味ひに」、小さな、しかし専門的な料理やへ寄

つたのである。

「震災後十年位のは、日本の経済界は名古屋が中心になるだらう。」民造は主筆の問ひに答へた。「——震災の当時は東京にゐなかつた。信州へいつてゐた。」と、あの生涯に二度とない「経験」を、むざむざ口にする（くち）ことがうるさくて、一×した。

料理やには誰もゐなかつた。七八年ぶりで、七八年前の、雪霰の降る日、藤村の「家」に就いて語りあつた記憶などを語りあふにふさはしかつた。ストーブに石炭を注いで、森井は、家のために芸術を断念してゐることや、役所づとめの苦勞などを語つた。「うむ、これはうまいものだ。」と微笑、風呂ふき大根を珍づらしいものとして味つた。彼れは、そこへ訪ねて来た新聞記者から、故郷を同じくするある仏教家が、講演の旅にきてゐることも聞いた。——雪がちらちらと降りはじめた。×と×のこみ入つた、平原の市街を二人は、灯びの明るい市街の中心へと歩いた。

「御園座へ寄つてみよう。」御園（みそのぞ）芸者の舞踊のお習ひがあるといふことだつた。

三、

舞踊（おどり）はもとより、彼れにとって「見られる」ものではなかつた。舞踊や演劇の Expert が研究するやうな義務と責任はもたなかつたが、三年余の欧羅巴の旅は、彼れに露西亞や端西の踊りや、独逸や仏蘭西や伊太利の音楽に、自ら親（おの）しませてゐた。彼れの眼は舞台を見るよりも、棧敷の上から、着飾つたこの平原の都市（まち）の美しいひと

の上にそゝがれずにゐなかつた。

舞踊ぶらむの中ほどまで進むだ頃だつた。直ぐ彼の傍の×横敷に、未だ十四五の背の高い雛奴と、二人きりで大人しやかに、熱心に舞台をみつめてゐる、どこか見覚えのあるひとりの二十歳あまりの芸妓が、しきりに彼れをみつめてゐるのが分つた。彼れは彼れの残の記憶をさかのぼってみるが、もとより名古屋に知つてゐる妓のゐやうはづはなかつた。彼れはいぶかしげに、時々、その輪郭や骨格の繊細で柔軟かではあるが、男前の、押出しの立派な姿を見つめた。

「あの。」ふと、自信づいたやうに、蒼づんだ立派な美しい顔に微笑と親愛と回顧の波がゆれた。結びたての大がらな銀杏の髪の毛の造りが、触れて絶縁されてゐた世界を揺曳させる。「野島先生ではいらっしやいませんの。」

彼れはそこに、やうやく、四年前の下谷の八千代子を見出さねばならなかつた。

「どうして、名古屋にゐるの。」

「家はすっかり焼けちやつたのよ。」彼女は、知らぬ他郷にゐる淋しさと気づまりから解放された瞬間的な情緒を、×付いた。いつも沈んでゐるやうに見える冷めたい彫像のやうな態度をくづして見せるのだつた。「でも、御無事で御帰朝になつて、何よりでございますわ。」彼女に四年前の彼れや彼女のことがよみがへるらしかつた。彼女は、彼につゝましい彼女にかへつて「久しい振り」の酒を継いだ。

「あなたと、N君がゐる時分、よく踊りの議論をしたっけね。あ

なたは、おゐ乃と手ひどい西洋舞踊の攻撃者だつたぢやないか。」
「それは、今だつてさうなのよ。」彼女は面を伏せた。彼れは、若柳流の彼女の踊姿の凛々しさを、よく日本橋倶楽部のおさらいに見たことを想ひ出した。

「いつ東京からこつちへ来てゐるの。」

「家の者が、一家をあげて来てゐるの。」

彼れに舞ひが見てゐられないやうに、彼女にも事実見てゐられないらしかつた。

「外へ出ようか。」「えゝ、そこまで、お供しますわ。」

木××屋の出口に薄っすらと化粧をし直した彼女が見×つてゐた。

四、

人と人の関係ほど不思議なものはないと彼れは考へずにゐられない。

彼れが、欧羅巴への旅に出ねばならなくなつた、その準備に急がしかつた時分、その頃「大観」を主筆してゐたNが、彼れの外遊費の調達に可成り好意をもつて奔走してくれたものである。それは、大隈侯がなくなつて間もない時分であつた。

彼れは成功のお祝ひに、一夜二人きりで語りあかすことにして、その座席を××××××に決めてをいた。

Nは、現に彼れのために外遊費の調達に骨折り乍ら、彼れの外遊を止めさせようとした。

「大隈さんが生涯洋行されなかつたのは、洋行してゐる間に自分

小林輝治

大会の席上で大杉君と野枝夫人をみましたが、鎌倉の未だ新築の木口の立派な、大邸宅に、同君をたづねて、当時のわたくしは大へんうらやましく感じたことを覚えてゐます。また、その時野枝さんが、玄関にあらはれて、普通のあの程度の家に住む家庭の主婦ならば、玄関にすわって夫の在否をこたへるべきであると思はれますが、襖にもたれて立ったまゝで、大杉は東京へ出かけました、とこたへられたのを覚えてゐます。野枝夫人が、あまり評判のよくない女性でゐられたのもさういふことが原因しないかと思ひます。又、大杉君の自叙伝によりますと、同君は今の内務大臣後藤新平君から、三百円か五百円かを困った時に貰はれたといふことですが、これなども、青年会館でみた同君の態度から思ひ合はせますと、わたくし共思想や自我の××に生活の××××の率を高くおくものにとつては、ずい分と深き省察を与へるものと思はれます。

「飯坂君はじめ三十余名の人々は今、牢にゐるとききます。わたくしの留守中に飯坂栄子さんもすでに牢へはいつて出て来てゐるとききます。——それやこれや思ひ合はせますと、わたくしは「縁がある、縁がない」ということ、「縁が深い、縁が薄い」といふことをしみじみと味はさせられるやうに思ひます。昨夜も八千代子の江戸前の踊りをみて、よみがへったやうに思つたことですが、亡くなつた大隈さんには一度会つてゐればよかつた思ふのです。

「名古屋はどこらかといへばわたくしにとっては縁が薄い土地ではないかと思つてゐます。日本へかへる船中で、この師団の騎兵聯隊長をしていられる伯爵とも同船しましたが、同伯爵にはドオヴア海峡をこえる時はじめて、お目にかゝり欧羅巴の各地で回遊しま

したが——白状すると、わたくしは、船の中で、名古屋に日本におけるわたくしの永住の地を決めようかとも考へたことがあるのです。

——

彼は、それで止めた。

翌日、彼は大阪へ出発したのである。

六⁽⁶⁾

翌年正月廿七日の朝、大阪からふたゞび名古屋をたづねた時、その夜の主催者だった成瀬は、彼れに、熱い乳風呂をたてゝもてなした。そして湯上りの彼れに血のやうに濃いココアをすゝめた。

「どうしてそう大人しくなつてしまつたのかな。もう少しあはれなくては損ぢやないか。日本全体が君の味方といふわけでもあるまいが、敵ばかりゐるわけでもないぢやないか。」と、彼れに lecture をすゝめた。彼れは答へなかつた。

八千代子に電話をかけたが、もう東京へ帰つたといふことだった。
縁^{えん}。

停車場のとなりのソファにゐた娘

ちらりと投げた眸の色は

真実いとし身も細る、

彼れは成瀬に示して微笑えみあつた。硝子ごしに日が映つてゐた。

一九二五年五月十日

(をばり)

注

- (1) 「おの」のルビは次に「ずか」が落ちている。
- (2) 大隈重信（天保9生）は大正十一年一月十六日に八十六才で没。清次郎の外遊は、この三か月後四月に迫っていた。
- (3) 以下、この章の終わり「名古屋に日本におけるわたしの永住の地を決めようかとも考へたこともあるのです。——」までが民造のことばである。したがって、この間の「」は、普通ならすべて『』とあるところである。
- (4) 「まみえる」と読ませるつもりか。
- (5) 「lepra」（癩病）の誤記であろう。
- (6) ここには「読点」が、他の章のようにつけられていない。